

家は静まりかえっていた。帰ってきたのではなく決意を告げに來たのだから玄関を通る必要はない。言峰は庭を通り、濡れそぼった身体もそのままにテラスから妻の部屋に向かう。庭は前に見たときよりもさらに朽ち果て、荒涼とした景色が広がっていた。窓に明かりもなく、枯れきった薔薇に囲まれて雨に打たれている家は廢墟のようだった。部屋に入った言峰に、いつもとおなじように床に臥せていた妻はすぐ気づき、ゆっくりと目を開けた。

「貴方——」

石で造られた部屋の中は暗く冷たい。雨にけぶる空と枯れた庭の色をうつした妻は死体のように見え、熱に潤んだ瞳だけが生氣を持っていた。

「おかえりなさい。きつと帰ってきてくれると……信じていました」

「いや」

弱り切った妻のささやかな希望を言峰は淡々と否定し、「帰ってきたのではない。おまえに、別れを告げに來た」

妻は腕で身体を支え、ひどく時間をかけて起きあがった。骨と皮ばかりの身体に体力はすでになく、氣力だけでみずからを支えているのが見てとれた。妻にはわずかな時間し

か残されていない。確実な死が影となって、部屋はおろか妻の全身を重苦しく包んでいる。

氣怠^{げだる}な顔を懸命に隠して、妻が笑顔をつくる。言峰が来るのを察していたのだらう、白粉をはたき、唇に薄く紅を引いていた。

言峰はそんな妻を見下ろし、残酷に口を開いた。

「私は、おまえを愛せなかった」

長い沈黙があつた。屋根を叩く雨が外の曠野を濡らしつづけている。雫^{しずく}が雨樋から洩れ、単調な音をたてて地面を打っている。雨の重みに耐えられなくなつたのか葉が一斉に雨を弾き、部屋の影をざわつかせた。

妻の笑顔は崩れない。臉が閉じ、ふたたび開く。色を失つた目の奥には、言峰がいままで見たこともないほどに強く揺るぎのない意思が見えた。穢^{けが}れのない、崇高な瞳だった。

静かに、しかし信念に支えられた声で妻は、

「いいえ、貴方は、私を愛していました」

それだけ言い、毛布の影からナイフを取りあげた。

咄嗟に言峰は手をさしのべる。見えたのは鋭利な刃にうつりこむ雨と灰色の空、そして自分の驚愕。言峰の手が届